

# 学内保育実習のあり方に関する実践研究

## Practical Research on the Ideal Way of on-Campus Childcare Training

児玉 珠美 Tamami Kodama

(愛知学泉短期大学幼児教育学科)

太田 美鈴 Misuzu Ota

(愛知学泉短期大学幼児教育学科)

井手 裕子 Yuko Ide

(愛知学泉短期大学幼児教育学科)

谷村 和秀 Kazuhide Tanimura

(愛知学泉短期大学幼児教育学科)

服部 壮一郎 Soichiro Hattori

(愛知学泉短期大学幼児教育学科)

山本 辰典 Tatsunori Yamamoto

(愛知学泉短期大学幼児教育学科)

### 抄 録

保育者養成課程において、保育実習は学びの主軸であり、「保育実習は、その修得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」と示されている。2020年初頭より、直接的な人との交流を分断してしまう状況が世界中に広がっていった。コロナ禍の影響は、最も濃密な接触を必要とする子どもと保育者の関係のみならず、保育者をめざす学生の保育実習へも及んでいった。

本学幼児教育学科においては、この状況に対し、2年生の保育実習Ⅱを、1週間の学内実習と1週間の現場実習との組み合わせ実習とすることとした。学内保育実習については、実習担当教員のみならず、学科全体の共通理解のもと、全教員の協力体制で取り組むことができた。学内保育実習Ⅱの内容については、できるだけ現場実習に近い形で実施できるように工夫した。子ども理解や保育者の姿からの学びは困難であったが、学内保育実習だからこそ学び得たものもあったと考えられる。さらに、その後の現場での1週間の保育実習Ⅱにおいては、実習Ⅰより高い評価を得た学生が昨年より増加していた。

本論文は、学内保育実習Ⅱ実践プログラム内容を記述し、その考察を通して、今後の保育実習指導方法への示唆と課題を明らかにすることを目的とする。

キーワード：保育実習 Childcare Intership, 学内保育実習 Childcare Training on Campus,  
コロナ禍における保育実習方法 Childcare Training Method under COVID-19

### 目 次

- 1 背景及び目的
- 2 学内保育実習実施までの経緯
- 3 学内保育実習Ⅱの目的と概要
- 4 学内保育実習Ⅱのプログラム内容
- 5 学生への事前指導
- 6 学生の意識変化
- 7 学生の実習振り返りと考察
- 8 学外保育実習Ⅱの対昨年評価比較
- 9 全体考察と今後の課題

## 1 背景及び目的

保育者養成課程において、保育実習は学びの主軸であり、「保育実習は、その修得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする<sup>1)</sup>」と示されている。この目的は、1962年に保育実習実施基準が施行されて以来、改正されることなく継承されてきた。全国保育士養成協議会では、保育実習のミニマムスタンダードを策定し、保育士養成に関わる機関の共通理解と協働の必要性を説いてきた。さらに、保育実習の目的を達成するためには、「座学と実学の往還性の原則」「実践重視の原則」「保育理念との照合」「子どもの最善の利益を考慮する保育の原則」の4つの理念が重要であるとしている<sup>2)</sup>。

2020年初頭より、直接的な人との交流を分断してしまう状況が世界中に広がっていった。コロナ禍の影響は、最も濃密な接触を必要とする子どもと保育者の関係のみならず、保育者をめざす学生の保育実習へも及んでいった。

本学幼児教育学科においては、この状況に対し、2年生の保育実習Ⅱを、1週間の学内実習と1週間の現場実習との組み合わせ実習とすることとした。また、学内保育実習については、実習担当教員のみならず、学科全体の共通理解のもと、全教員の協体制で取り組むことができた。学内保育実習Ⅱの内容については、できるだけ現場実習に近い形で実施できるように工夫した。子ども理解や保育者の姿からの学びは困難であったが、学内保育実習だからこそ学び得たものもあったと考えられる。

毎日の記録から、学生の客観的な気付きがあり、学生が主体的にプログラム内容を改善していく状況が生まれた。また、終了後の学生の振り返りからは、保育士の役割と子どもの役割を果たしたことで、両者の視点から保育内容を考察することができたこと、子どもたちを前にする前に、じっくりと自分の保育活動を見つめなおす機会となったこと、学外実習に向けての課題が明らかになっていったこと等、多くの学びの機会となったことが述べられていた。さらに、その後の現場での1週間の保育実習Ⅱの評価において、昨年より高い評価割合となった。

本論文においては、学内保育実習Ⅱ実践の考察を通して、今後の保育実習指導方法への示唆と課題を明示することを目的とする。

## 2 学内保育実習実施までの経緯

2020年、コロナ禍の状況が悪化していく中、4月10日、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため愛知県緊急事態宣言が発出され、5月4日までの間、「愛知県緊急事態措置」が実施されることとなった。本学2年生の保育実習Ⅱの予定期間は6月15日(月)～27日(土)であったため、保育実習担当者による協議の結果、連休前に実習予定の13の自治体の実習受け入れ可否の確認をすることになった。結果は下記の通りであった。

- ① このままの状態、緊急事態宣言が解除されれば受け入れる。ただし、体温チェックなどの条件を付ける。4自治体
- ② 期間、時短など養成校側に考慮してもらえればありがたい。1自治体
- ③ 7月以降にしてほしい。3自治体
- ④ 今後の状況によって判断する。5自治体

その後、5月4日、政府において、緊急事態宣言の期間を5月31日まで延長することが決定されたが、5月25日の政府の緊急事態宣言解除を受け、愛知県も26日に解除となった。緊急事態宣言は学校や公共機関に多大な影響を及ぼし、通常授業等の中止をせざるを得ない状況となった。しかしながら、保育施設においては、母親の就労を支援するためにも希望保育という形で保育を継続していた。保育現場では、できるだけ外部の人間との接触を避け、子どもと保育者の感染防止を徹底させることが急務となった。

5月の連休後、複数の自治体からの受け入れ延期依頼の連絡があり、6月からの2週間の実習は実施困難であると判断した。すでに3月の時点で、コロナ禍における実習に関する通達があり<sup>3)</sup>、他養成校の対応方法も確認しながら、学内実習への代替措置も検討していた。学内実習で保育実習Ⅱの目的を果たすことができるのか、期間や内容をどう設定すべきかなど問題は山積していた。実習予定園にできるだけ負担をかけないこと、学生が現場での実習の機会を少しでも持つようにすること、この2点を達成目標とし検討した。その結果、6月実習に学内実習1週間、予定実習園には8月での1週間実習の延期を依頼した。この時点では、2自治体を除く11自治体及び予定の全民間保育所が、8月の保育実習受け入れを承諾するという状況であった。

### 3 学内保育実習Ⅱの目的と概要

本学幼児教育学科学内保育実習の目的及び概要について記述していく。

#### (1) 学内保育実習Ⅱの目的

学内保育実習Ⅱにおいては、後半の現場保育実習に向けて保育の一日の流れを理解し、できる限り子どもの姿を想定し、発達過程に対応した遊び活動等を考え、実践し、記録を通して自分の保育活動を省察し、今後の課題を明らかにすることを目的とする。

#### (2) 学内保育実習Ⅱの概要

①期間 6月22日（月）～6月27日（土）

②場所 本学5号館5階フロアすべて

4つの教室と廊下・ラウンジエリア

全教室に放送アナウンスが聞こえるように、各教室に簡易スピーカーを設置。電子ピアノを各教室に準備。

#### ③内容

基本的に、学外の保育実習Ⅱと同じ内容とする。子どもを想定し、全員が実習生の立場で保育活動及び部分実習を実施できるようにする。指導案についても、保育実習Ⅱの前半を担えるように、実習担当教員により指導する。

### 4 学内保育実習Ⅱのプログラム内容

#### (1) 愛知学泉保育園の設定

学内保育実習Ⅱプログラムについては、8月の現場保育実習Ⅱに向けて、保育現場の一日の流れに可能な限り近い内容になること、子どもたちを想定した部分実習の指導案作成と実践に、全学生が取り組めることが可能になるようにした。（表1）

5階フロアは「学泉保育園」となり、現場保育園での実習に臨むことを学生たちが意識できるように工夫した。到着後にエプロンや髪など、実習にふさわしいように整えること、出勤簿の捺印、各教室でスピーカーを通しての職員朝礼の実施、一日のスタートから帰りまで、保育士の役割担当を決め、園児役の学生を指導していくようにした。

実習記録は、学外保育実習Ⅱの記録をそのまま使用し、学生は現場での実習と同じように毎日の記録を書くこととした。記録の添削指導については、教育実習、施設実習担当教員の協力を得て、教員6名が毎日担当することとした。

#### (2) 全教員による協力体制

1年生は通常授業を実施しており、教員の負担も大きかったが、部分実習については表2に示した通り、全教員の協力の下、全学生が教員による視察と指導を受けることができた。下記内容は教員への協力依頼内容である。

①前半の教員は8:30～11:30、後半の教員は11:30～14:45までの指導をする。

②指導内容は、各2人分の部分実習の評価と時間の許す限りの実習態度（密など）の指導をする。

③評価者用のチェックシートとクラス名簿はバインダーに挟んでクラス内に置き、評価対象学生の名簿にチェックの上、評価をする。

#### (3) 学生の部分実習及び保育担当

学生の部分実習及び保育の分担については、下記のように設定した。

- ・部分実習は1人1回実施する。1回45分（教材や部屋の環境構成の準備含む）1日4回実施する。

- ・保育者になる人以外は園児役で保育に参加する。（振り返りシート記入）

- ・部分実習以外の1日の保育（4パート）は交代で積極的に様々な保育場面を経験する。

保育の役割4パートは下記の通りとした。

#### ①役割パート1（出席チェックとお約束）

視診（各席に座っている園児一人一人の顔を見て朝の挨拶をしながら健康状態を把握する）→出席をとる→朝の集まり（歌・体操など）→排泄→水分補給など→お約束の時間（前日の反省点改善点を伝達する）9時30分まで。

#### ②役割パート2（アレルギーチェックをする）

配膳、食事のあいさつ、食事、片付け、排泄

#### ③役割パート3（睡眠チェックをする）

午睡準備→午睡（5分おきに2度、睡眠チェックを実施する）

#### ④役割パート4（実習の振り返りの司会をする）

降園準備、帰りの集まり（今日の振り返り、歌、あいさつ）、降園（保護者に伝達）

#### (4) 学内実習の評価

学内保育実習Ⅱの評価については、部分実習評価者用チェックシートによる担当教員評価及び保育実習担当者の観察評価による総合的な評価とした。

最終的な保育実習Ⅱの評価は、その後の現場保育実習での園の評価となる。下記が部分実習評価者用チェックシートの項目となる。

- ① 実習の態度（服装・出席・言葉遣い）
- ② 指導案の内容（子どもの発達理解・指導案作成の理解・現実的な計画）
- ③ 保育者としての行動（倫理観・保育者としての自覚・情熱・真剣さ）
- ④ 部分実習の保育技術（手際・言葉かけ・子どもを惹き付ける魅力）
- ⑤ 園児役としての行動（心理理解・発達理解・想像力）
- ⑥ 観察記録の内容（時間配分・内容の的確さ・文字の丁寧さ）
- ⑦ 振り返りの視点（自己分析の適切さ・改善への意欲、保育の情熱・客観的な自己課題）

表1 学内保育実習一日の流れ

時間	内容
	出勤簿捺印
8:30	役割パート1（出席チェック）視診、好きな遊び、片付け、排泄、朝の集まり（歌・体操など）
9:30	部分実習①～10:15
10:30	部分実習②～11:15
11:30	部分実習③～12:15
12:15	役割パート2（アレルギーチェック）配膳、食事のあいさつ、食事、片付け、排泄
12:30	役割パート3（睡眠チェック）午睡準備、午睡、消毒作業（椅子、机、玩具）
13:15	部分実習④～14:00
14:15	役割パート4 降園準備、帰りの集まり（今日の振り返り、歌、あいさつ）、降園（保護者に伝達）
14:45	観察記録記入
15:15	保育の振り返り（評価反省）
16:00	実習記録提出、実習記録添削指導
17:00	終了

表2 教員の担当表

	G1 りんご		G2 ひまわり		G3 くじら		G4 もも		備考
6月22日(月)	造形室		美術室		小児保健		551		前：部分実習①② 後：部分実習③④
	○児玉	児玉	○太田	太田	○服部	伊藤て	伊藤と	○井手	
6月23日(火)	551		造形室		美術室		小児保健		前：部分実習①② 後：部分実習③④
	○山本	山本	○服部	児玉	○太田	太田	本多	○谷村	
6月24日(水)	小児保健		551		造形室		美術室		前：部分実習①② 後：部分実習③④
	○谷村	本多	○服部	本多	○児玉	児玉	○太田	太田	
6月25日(木)	美術室		小児保健		551		造形室		前：部分実習①② 後：部分実習③④
	○太田	太田	伊藤て	○井手	○山本	山本	津島	○児玉	
6月26日(金)	G1、G2遠足		G3、G4遠足		実習記録指導		実習記録指導		雨天の場合 DVD学習
	○児玉	児玉	○太田	太田	○児玉	児玉	○太田	太田	
6月27日(土)	造形室		美術室		小児保健		551		前：部分実習①② 後：部分実習③④
	○谷村	谷村	○児玉	児玉	○太田	太田	○服部	服部	

※○印の教員は、そのクラスの実習記録の添削担当。(17人から18人分)

## 5 学生への事前指導

学内保育実習実施前の保育実習指導の授業において、組別メンバーの発表、組名及び各組代表決め、部分実習指導案作成、教室の組名表示絵作成及び役割のローテーションを考えた。直前の事前指導の時間には、部分実習のリハーサル等を行った。また、学内実習に臨むにあたって、下記の内容について指導した。

- ・毎日、観察記録を記入し提出する。（30分以内でしっかり書く）
- ・服装は全員保育のできる服装、ヘアカラー（就職試験、保育実習同様）、マスク着用、弁当持参。
- ・保育現場にふさわしい言葉遣いやマナーを守る。
- ・換気と適宜消毒をする。密を避ける。
- ・2週間前から実習終了まで毎日体調チェックをチェック表に記入する。
- ・金曜日は2グループに分かれ遠足及び体操を実施

する。気温 29 度以上、雨天は中止。中止の場合は、DVD 学習及び 8 月保育所実習の準備とする。

組別メンバーは、保育実習担当教員により、個々の学生の特性が実習に活かせるよう考慮し、決定した。組名及び学生数は下記のようになった。

- ① りんご組 18 名
- ② ひまわり組 17 名
- ③ くじら組 17 名
- ④ もも組 17 名

また、部分実習及び一日の役割分担についても、各組で全員が担当するようにローテーションを組み、学内実習に臨むように指導した。分担表は表 3 の形式で作成した。

なお、実習記録の書き方については、保育実習 I で園から指摘が多かった語句の誤用、誤字、子どもの活動、保育者の援助・配慮、環境構成の書き方等について指導した。

表 3 部分実習及び役割分担（2 日分）

りんご組		年齢	活動	りんご組		年齢	活動
部分実習①	学生 A	4	朝顔制作	部分実習①	学生 I	5	けん玉遊び
部分実習②	学生 B	4	とんぼ制作	部分実習②	学生 J	4	うさぎスタンプ
部分実習③	学生 C	4	魚釣り遊び	部分実習③	学生 K	5	水族館制作
部分実習④	学生 D	3	花火制作	部分実習④	学生 L	4	ミノムシ制作
役割 1	学生 E			役割 1	学生 M		
役割 2	学生 F			役割 2	学生 N		
役割 3	学生 G			役割 3	学生 O		
役割 4	学生 H			役割 4	学生 P		

## 6 学生の意識変化

毎日の学生たちの実習記録を読んでいく中で、3 日目頃から、下記のような内容が多くの子供たちの記事（反省・感想・問題点等）に記述されるようになってきた。

- ・部分実習での園児役の子供は、発達過程をちゃんと想像して、先生役の子供に対応していない。
- ・園児役の子供は、先生役の子供に友達として接してしまっている。
- ・部分実習が慣れ合い的な雰囲気になってしまっている。
- ・もっと、子供の視点から活動を創りあげていけないといけない。

- ・先生役に協力するのではなく、うまくいかない状況も創っていかないと、現場実習に活かすことができない。

これらの内容は、学生たちから主体的に出てきた反省であった。学生たちの意見を反映するために、3 日目より各部分実習終了後に意見交換をするフィードバックの時間を設定することにした。予想通り、厳しい意見も含め、学生たちは活発な意見交換をし始めた。さらに、他学生からの意見や助言を受けて、終了した部分実習の改善方法について、実習担当教員に相談をする学生たちも出るようになった。

また、帰りの会において、その日の実習全体の反省を全員で発表し合い、翌日の課題を決定し、全員

共有の下、課題に取り組むこととなった。この取り組みも学生からの発案であった。4日目の朝の会から各組の代表学生がマイクを持ち、その日の課題を発表した。

さらに、いくつかの組では、保育園の雰囲気全員で創っていくことが、より学びに繋がっていくことに気付き、部分実習以外の時間においても園児役に徹した言動をする学生たちの姿がみられるようになった。

## 7 学生の実習振り返りと考察

実習後、模擬研究保育を保育者役、園児役それぞれの視点で振り返った。反省点や学んだこととして次のようなことが挙げられていた。多く挙げられていた内容を記述する。

### (1) 学生の反省及び学んだこと

#### ①保育者の視点

- ・手遊び、ハンカチ遊びを使って導入できたことは自信につながった。事前準備がしっかりできていなかったので、すぐできるように練習していききたい。
- ・言葉がけも年齢に合った対応ができるように勉強して実習に臨みたい。
- ・子どもの作品に対して「すごい」「上手」といった言葉がけばかりしてしまったので、子どもが描いてよかったと思えるよう声掛けを意識したい。
- ・説明ばかりに集中しすぎて声掛けが少なくなってしまったので、もっと子どもたちの目線になって活動を行うことが大切だと思った。
- ・保育者として部分実習を行ってみて、子どもの発達過程をもっと考えて行うことが大切だったと感じた。
- ・言葉遣いにはとても意識した。折り紙を折る際には真ん中を「おへそに向かって」などの子どもがわかりやすい表現に変えていった。
- ・表情や目線などには特に意識して「先生が楽しむ」ということをモットーに行った。
- ・自分がいっぱいいっぱいにならず、しっかり子どもにも目を向けることが大切だと学んだ。
- ・大勢の人を前にすると緊張してしまい制作の説明がうまくできなかつたり、声掛けができなかつたりした。課題がたくさん見つかったので実習で生かしたい。

#### ②園児役視点

- ・園児役を演じたからこそ、どの場面で保育者のどんな配慮が必要かが分かり、どうしたら楽しい内容になるのか学べた。
- ・「子どもの視点で考える」ことの重要さに気付けた。作って終わりではなく遊びにつなげることが大切だと思った。
- ・時間ばかりを気にするのではなく、余裕をもって子どもに関わることができれば楽しい時間が過ごせるのではないかと思った。
- ・ただ話すのではなく、子どもに分かりやすいいいかたをすることが大切だと学んだ。
- ・子どもたちの年齢に合わせた制作をし、子どものペースに合わせることも大切だと思った。
- ・一つ一つの説明を一気に行うのではなく、一人一人丁寧に説明することが大切だと感じた。
- ・一人一人に対しての声掛けをしっかりといて全員をしっかり見ているという感じがあり、子どもは安心できると思った。
- ・子どもたちの反応を見ながら進めていったり周りの全体を見ながらすすめていったりしていたことを役立てたいと思った。
- ・どの模擬保育も勉強になることが多く、実際に現場に入ったとき参考にしたい。

※下線部は執筆者による

### (2) 考察

学生の記述内容を通して、今回の学内保育実習Ⅱにおける学生の学びの内容について考察していく。記述内容において、下線部は特に注目すべき内容と思われる箇所である。

まず保育者の視点からの学びとして、「事前事後の準備」「子どもの目線に立つこと」「子どもの発達過程に合った遊びや制作」「保育者が楽しむ」「子どもがわかりやすい、具体的な語りかけ」といったことがいかに大切かについて気付き、学んだ学生が多かったことがわかる。

次に園児役視点から学んだこととして、「保育者の配慮」「子どもの視点で考えること」「余裕を持って子どもたちに関わること」「子どもたちの反応を見ながら保育活動を進めること」「一人ひとりに向けての語りかけ」といったことが挙げられている。

保育実習Ⅱにおいて、全国保育士養成協議会ミニマムスタンダードでは、下記のような目標を設定し

ている<sup>4)</sup>。

1. 保育実習の意義と目的を理解し、保育について総合的に理解する。
2. 実習や既習の教科目の内容やその関連性を踏まえ、保育の実践力を修得する。
3. 保育の観察、記録及び自己評価等を踏まえた保育の改善について、実践や事例を通して理解する。
4. 保育士の専門性と職業倫理について理解する。
5. 実習の事後指導を通して、実習に総括と自己評価を行い、保育に対する課題や認識を明確にする。

これらの目標に対し、学生たちの学びについて考察してみると、1の「保育実習の意義と目的を理解し、保育について総合的に理解する。」2の「実習や既習の教科目の内容やその関連性を踏まえ、保育の実践力を修得する。」に関しては、ある程度の達成ができていたのではないかと考える。もちろん、大前提となる子どもたちが存在しない場での学びであるため、保育を総合的に理解することは難しい状況であった。しかしながら、園児役を通してこそ学び得たこと、様々な実習生の活動への取り組みの姿を通して省察できたことも多かったのではないだろうか。今回の学内保育実習Ⅱプログラムが、現場実習の事前指導的な役割を果たしていたと考えられる。

## 8 学外保育実習Ⅱの対昨年評価比較

保育実習Ⅰから学外保育実習Ⅱの園による評価の変化について、昨年と比較をした。それぞれの実施時期は下記の通りである。

〈2019年〉

保育実習Ⅰ 2019年1月14日～1月27日 109名  
 保育実習Ⅱ 2019年6月19日～6月29日 108名

〈2020年〉

保育実習Ⅰ 2020年1月14日～1月27日 71名  
 保育実習Ⅱ

- ①2020年8月17日～8月22日 35名
- ②2020年8月24日～8月29日 20名
- ③2020年10月5日～10月10日 2名
- ④2020年11月9日～11月14日 12名
- ⑤2020年10月25日一日実習 4名

本年度の学外保育実習Ⅱについては、自治体や園によって受け入れ可能時期が異なっていたため、4期に分散しての実施となった。1自治体については実習期間短縮となり、4名が1日分を別園での観察実習で補充することとなった。昨年と今年の保育実習ⅠとⅡ評価段階S・A・B・C・Dの割合は、表4のような結果となった。また、評価変化をグラフに表したものが、図1・2となる。

表4 2019年及び2020年保育実習Ⅰ・Ⅱの評価割合%

評価	2019 保育実習		2020 保育実習	
	I	II	I	II
S	2	1	1	1
A	18	21	9	24
B	69	55	69	66
C	11	23	21	10
D	0	0	0	0

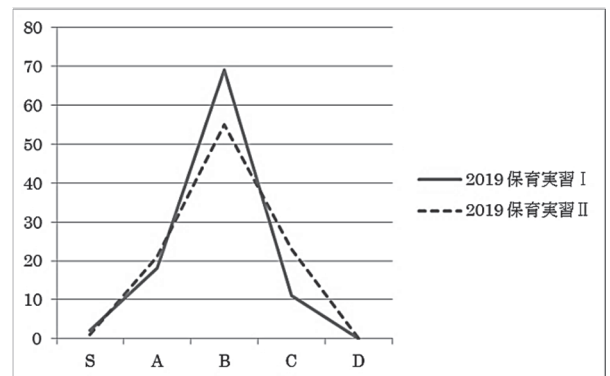


図1 2019年 保育実習Ⅰ、Ⅱの評価変化

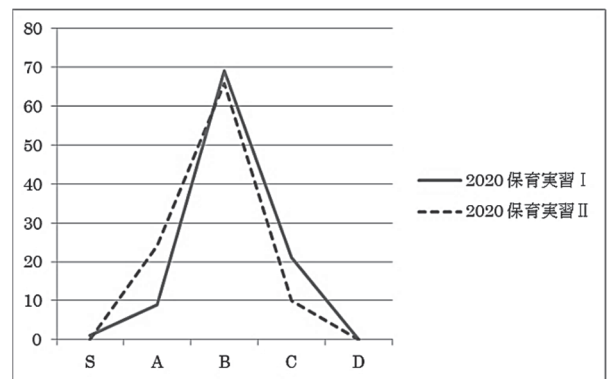


図2 2020年 保育実習Ⅰ、Ⅱの評価変化

2019年保育実習ⅠとⅡの評価変化をみると、A評価の学生は3%増加しているが、B評価が14%減少、

C評価が11%増加しており、全体的に評価が低くなっていることがわかる。これは、保育実習Ⅱにおいては、Iよりもさらに高いレベルの実習内容が求められており、当然の結果ともいえる。

2020年の実習ⅠからⅡへの評価変化みると、B評価の学生については、ほとんど増減はないが、A評価の学生は15%増加、C評価は11%減少している。A評価学生増加とC評価学生の減少ということから、全体的に評価が高くなっていることがわかる。

## 9 全体考察と今後の課題

全国保育士養成協議会ミニマムスタンダードにおいては、前掲した保育実習Ⅱの目標の達成のための取り組むべき内容を下記のように示している<sup>5)</sup>。

1. 保育実習による総合的な学び
  - (1) 子どもの最善の利益を考慮した保育の具体的理解
  - (2) 子どもの保育と保護者支援
2. 保育の実践力の育成
  - (1) 子どもの状態に応じた適切な関わり
  - (2) 保育の知識・技術を活かした保育実践
3. 計画と観察、記録、自己評価
  - (1) 保育の全体計画に基づく具体的な計画と実践
  - (2) 保育の観察、記録、自己評価に基づく保育の改善
4. 保育士の専門性と職業倫理
5. 事後指導における実習の総括と評価
  - (1) 実習の総括と自己評価
  - (2) 課題の明確化

今回の学内保育実習Ⅱにおいて、上記の内容を網羅することは難しい状況であった。大前提となる子どもたちの存在がないだけでなく、施設や環境の制限もあった。上記の保育実習Ⅱの内容の中で、学内実習を通して実施できたものは、保育の知識・技術を活かした保育実践(2-2)、保育の全体計画に基づく具体的な計画と実践(3-1)、保育の観察、記録、自己評価に基づく保育の改善(3-2)、事後指導における実習の総括と評価(5)といった事項に留まるであろう。

しかしながら、学内保育実習Ⅱのプログラムを通して学生たちが学んだことは、学外実習では学び得なかったことでもあるとも言える。特に、1週間継

続して、園児の視点から学生が取り組む様々な部分実習活動や一日の保育活動を観察できたことは、貴重な経験となったといえる。学生たちの振り返りからも、保育活動を創り上げていく大変さと楽しさ、より客観的に自身を省察する眼、協働で保育に取り組む姿勢など、多くのことを学びとったと考えられる。その成果は、園の事情で実施できなかった例を除き、ほとんどの学生がその後の学外保育実習Ⅱにおいて、責任実習を実践したということにも顕著に現れている。学外保育実習Ⅱの反省会においては、一週間という短期間の学外実習ではあったが、非常に充実した内容であったこと、部分実習を学内実習で取り組み、多様な部分実習に園児役として参加していたため、対象年齢が変わっても、対応しやすかったこと等、学生たちは述べていた。

また、このような学内実習を事前指導で実施してほしいという声もあった。連続で体験することが大きな気付きや学びに繋がるので、どこかでぜひ実施してほしいという内容であった。今回の取り組みは、保育実習事前指導の在り方にも、大きな示唆を与えてくれるものであったと考える。

冒頭でも述べたように、「保育実習は、その修得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」という目標は、長きに渡り守られてきたものである。たとえ、どのような状況になっても、できる限り、この目標を達成するための工夫と努力をしていくことが必要となる。

今、各養成校のコロナ禍状況における様々な実践報告がなされている。今後は、他養成校との様々な実践交流を通しての学び合いが必要となってくる。その根底には、日本の保育者養成は、単独の養成校に委ねられるものではなく、社会全体で育成していくべきものだという理念が存在する。今回の事態においても、地域の養成校が知恵を出し合い、相互に助け合っていくような状況があればと考えることが何度もあった。実習担当教員が個人的に他養成校の情報や助言を聴きながら対応もしていたが、地域の養成校全体との連携をとることなく、養成校教員として閉鎖的になってしまったことは否めない。

今回のコロナ禍がもたらした状況を、今後どう乗り越えていくか、そのような状況の中で保育者をどう育成していくことができるのか、保育者養成そのものが試されているのかもしれない。先のみえない現状を受け入れつつ、人類の未来を見据えて希望を



見出していけるような保育実習を模索していくことが、今後の大きな課題となる。

#### 資料 学内実習の様子



写真① 園児役学生に説明をする保育士役学生



写真② 制作の援助をする保育士役学生



写真③ 実習最終日 廊下でのくじら組記念撮影



写真④ 終了証授与式後のひまわり組写真

#### 引用文献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」平成15年12月9日,日雇児発第1209001号.
- 2) 一般社団法人全国保育士養成協議会「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2」中央法規,2018,p2.
- 3) 厚生労働省子ども家庭局保育課「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について」令和2年3月2日.
- 4) 「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver.2」p.69
- 5) 同上,P70-75

(原稿受理年月日:2021年1月7日)